十九歳のジェイコブ

2014.6

新 作
New Play

Nineteen-year-old Jacob

小劇場

●前売開始：2014年4月6日（日）

原作：中上健次
台本：松井 周
演出：松本雄吉

企画意図

終生「路地」にこだわり、人間の業やほとばしる生命への執着を描き続けた作家、中上健次。46歳という若さで急逝してから20年、彼の小説を新進気鋭の劇作家・松井周が舞台化します。演出には大阪を拠点に他の追随を許さないダイナミックな野外劇を40年にわたり展開してきた「維新派」の松本雄吉を迎え、新国立劇場・小劇場に「路地」に生きる人々を描き出す意欲作です。

作 品

中上健次の小説『十九歳のジェイコブ』を主人公・ジェイコブとユキとの友情、もしくは愛情の物語として戯曲化。

放浪する者たちにとっての教会であるジャズ喫茶、讃美歌としてのジャズ。ジェイコブの叔父、高木直一郎が破壊していった「路地＝聖地」を失ったジェイコブは、新しい聖地を求めてさまよう。

ジェイコブとは正反対のタイプであるユキも「古き良き故郷＝家族」を失い、「変わりきった故郷＝父の大企業の権力下にある」に憎悪の念を抱いている。

マイルス・デイビスのSketches of Spainに郷愁を感じることもあれば、アルバート・アイラーのSpiritual unityに身を任せて空っぽになるジェイコブ。

ヤコブ（兄を出し抜いた者の意味）の英語読みであるジェイコブは兄の自殺や叔父・直一郎の冷血な振る舞いと腹違いの妹などに罪の意識を感じ、自身を汚しきることと教会＝ジャズ喫茶に通うことでバランスを取ろうとしているのかもしれない。

ジャズによって呼び覚まされるジェイコブの記憶がまとわりついては去っていく追憶の物語である。

台本作家からのメッセージ

松井 周

中上健次に松本雄吉さんという組み合わせを聞いて興奮した。もし中上健次が生きていて、戯曲を提供する機会があったら凄まじい作品が出来上がったのではないだろうかと。

もちろん、それは叶わない夢なので、さてどうしようと途方に暮れた。何故なら、僕の中で、中上健次という存在は山脈のように高く、遠くに存在しており、うかつに手を出すと怪我をする気がしたからだ。実際、一作品読むだけでぐったりする。しかも、小説として完成されているという印象が強く残るものが多い。

ただ、『十九歳のジェイコブ』という作品に出会って、これはもしや、と思った。ジャズの音や夕焼けの光をバシャバシャと浴びているうちに、誰かにとっての記憶と現実の境目が溶け出すような作品（個人的なイメージ）だったからだ。演劇にとって、五感を刺激しながら「今、ここ」と「虚構」を混ぜ合わせていくのは得意分野であり、しかも、松本さんにもつながる線があるに違いないと、ひとり盛り上がった。

しかし、この作品、読めば読むほどわからなくなるのも事実。ジェイコブという人物の不可思議さ、登場人物のディスコミュニケーション、そして何より作品世界全体を覆う不能感。とはいえ、それらこそが現代に通じる要素だとも思っているので、先は長いが旅するように書いていこう。

演出家からのメッセージ

松本雄吉

十九歳のジェイコブへ

中上健次の聴覚を可視化すること……、「ジェイコブにはそのコルトレーンのアルトサックスが音ではなく音のひとつひとつを強い喉の力で潰すために吹いていると聴こえた」この聴覚。「風が吹き上がって草むらを揺り、音が一斉に鳴る。音はわきあがり潰れ、わきあがる」音が消えるのではなく潰れるという。さらに「ジョン・コルトレーンの吹く音が、音ではなく風、風ではなく此処と彼方の境目にある祈りのようなものであることに気づいていた」この越境の聴覚。さらに「音の芯は直接耳から心臓を貫く。その針のようにとがった音の芯は心臓から血管に入り、ジェイコブの体そのものがジャズの共鳴板になっている」この身体性。ジャズを聴く中上健次の異能な聴覚がこの文学の基底にある。彼の聴覚を頼りに、音楽ではなく、音そのものによる演劇、音によって呼び込まれる風景のあらわれよう、それを舞台上に可視化すること、今回初めてタッグを組む脚本の松井周と若い俳優たちとそのことの可能性をじっくりと探ってみたい。

スタッフプロフィール

十九歳のジェイコブ

中上健次

Nakagami Kenji

1946年、和歌山県新宮市生まれ。和歌山県立新宮高校を卒業と同時に上京。同人誌「文芸首都」で執筆活動を開始し、76年『岬』で第74回芥川賞を受賞。戦後生まれ初の受賞者となる。77年、長編小説『枯木灘（かれきなだ）』で第31回毎日出版文化賞、翌年同作品で第28回芸術選奨文部大臣賞新人賞受賞。他に、『地の果て 至上の時』『日輪の翼』『讃歌』『千年の愉楽』『奇蹟』『異族』などの長編小説に加え、『化粧』『水の女』『熊野集』『重力の都』など数多くの短編小説集、紀伊半島のルポルタージュ『紀州〜木の国根の国物語』や脚本など。92年8月12日永眠。享年46歳。

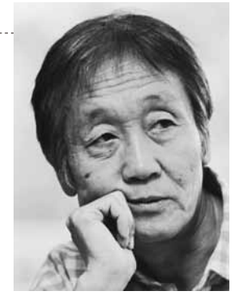
松井 周

Matsui Shu

1972年、東京都出身。96年に平田オリザ率いる劇団「青年団」に俳優として入団。その後、作家・演出家としても活動をはじめ、2004年青年団若手自主企画公演『通過』（第9回日本劇作家協会新人戯曲賞入賞）、05年『ワールドプレミア』（第11回同賞入賞）、06年『地下室』、07年『シフト』を経て、同年9月『カロリーの消費』により劇団「サンプル」を旗揚げし、青年団から独立。バラバラの、自分だけの地図を持って彷徨する人間たちを描きながら、現実と虚構、モノとヒト、男性と女性、俳優と観客、などあらゆる関係の境界線を疑い、踏み越え、混ぜ合わせることを試みている。作品が翻訳される機会も増え『シフト』『カロリーの消費』はフランス語に、『地下室』はイタリア語に翻訳されている。08年『家族の肖像』、09年『あの人の世界』は、それぞれ第53、54回岸田國士戯曲賞最終候補にノミネート。近年は大学講師、小説やエッセイなどの執筆活動、CMや映画、ドラマへの出演など幅広い活躍を行う。10年『自慢の息子』で第55回岸田國士戯曲賞を受賞。

松本雄吉

Matsumoto Yukichi



維新派主宰、劇作家・演出家。1946年熊本県天草生まれ。野外公演にこだわり、映画さながらの大規模なセットや、独自のスタイル「ヂャンヂャン☆オペラ」を確立し、70年の結成以来一貫してオリジナル作品を上演している。代表作に『さかしま』（奈良・室生）や、『台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき』（岡山・犬島）がある。オセアニアやヨーロッパ、中南米など、海外でも屋内外問わず作品を発表している。これまでに朝日舞台芸術賞や芸術選奨文部科学大臣賞などを受賞し、2011年には紫綬褒章受章。